



TITLE:

生産力の自己運動 - 唯物史観の 一 批評 -

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 生産力の自己運動 - 唯物史観の一 批評 -. 経済論叢 1933,
36(5): 761-781

ISSUE DATE:

1933-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130315>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟叢論

第五號

第三十六卷

昭和八年五月一日發行

論叢

國有鐵道の民營化……………法學博士 神戸 正雄
生産力の自己運動……………文學博士 高田 保馬
ヘーゲル史觀の實踐的構造……………經濟學博士 石川 興二

時論

昭和八年度豫算^{より}觀^{たる}財政計畫……………法學博士 小川 郷太郎

研究

獨占産業組織の社會的影響……………經濟學士 大塚 一朗
平均利潤率再論……………經濟學士 柴田 敬

說苑

中心都市における工業集積……………經濟學士 菊田 太郎
英米兩國所得稅の特徴……………經濟學士 佐伯 玄洞

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

（禁轉載）

生産力の自己運動

——唯物史觀の一批評——

高田保馬

唯物史觀又は史的唯物論に對する批評は種々なる點から加へ得らるであらう。大きく分けて云へば、一方唯物史觀がよつて立つところの基礎と見らるる唯物辯證法そのものを吟味することから。他方、唯物辯證法より唯物史觀に到るために、新に附け加へらるることを要する歴史的社會的知識そのものを吟味することから。勿論唯物辯證法又は辯證法的唯物論がマルクス自身の思想であつたか否か、それはエンゲルス思想としてのみ見るべきではないか。此點については、深く考察を必要とする問題が潜む。けれどもそれはここに問題として取扱ふところではない。唯物辯證法から出發することにする。さうであるにしても、唯物辯證法をとると云ふことは、直に唯物史觀即ち史的唯物論をとると云ふことではない。前者と後者との間には著しい距離がある。前者から後者にうつる爲には、此距離をつなぐ爲のかけはしを必要とする。此かけはしとなるも

のは、即ち一定の歴史的社會的知識である。

此事は今まで、たびたび問題とせられたることである。修正主義の人人は唯物史觀と唯物辯證法とを切りはなすのを常とした。修正主義の人人と争ひつづけたカウツキイとても、唯物史觀をとりながら、他方新カント主義の上に立つて辯證法的唯物論をとつてゐない。マクス・アドラーは唯物史觀を全く實證的史觀と見てゐる。そればかりではない。久しき間、唯物史觀と經濟理論とを含むかぎりのマルクス學説は唯物辯證法から切りはなされて考察せられ、信奉せられ、吟味せられて來た。

『謂はゆる史的唯物論、及びそれと密接の關係ある——經濟學の任務、方法、範疇に關する、及び社會特に資本主義社會の經濟的發展に關する思想の一團は、殆んど皆彼れ等に其成立を負ふものである。』『かくてマルクス主義なる語によりて一般に近代的世界觀の上記の二方面のみが指稱せらるるに至つた。哲學の理論に對して深き理解をもたぬ一般公衆はさる事ながら、マルクス及びエンゲルスの忠實なる學徒を以て自ら任ずる人人までも此慣はしに従つた。茲において該世界觀の歴史的並に經濟的方面は、哲學的唯物論に倚憑せぬものとして、否殆んど是に反對せるものとして視られる事となつた。』『さればかゝる所爲を敢てする人々の間には、マルクス主義を新に基礎づける必要がおのづと生れて來る。此の必要に應ずる爲に彼れ等は』『該主義をば孰れか或る哲學者と關聯せしめやうとする。例へばカントに、マツハに、アヴェナリウスに、オストワルトに、又最近にはヨセフ・ディーツゲンに。』

否、最も明白にレニン主義の上に立つ人人とても、此距離を否認しない。或るものは云ふ。『社會現象への哲學的唯物論の擴張は、社會的發展の合法則性を辯證法的唯物論の一般法則から思辨的に導き出すことを意味する、と考へるのは不當であらう。すべてのものが諸矛盾の不可分性で

あり闘争であること、すべてのものが運動及び発展のうちにあること、等の理解からは、社會における諸矛盾の闘争が正に階級闘争であること、社會の發展が社會の生産力および生産關係の發展であること、等の理解に至るまでには——大なる距離がある。このことの理解の爲には尙、辯證法的唯物論の一般法則の知識の外に人類の事實的歴史の研究が必要である²⁾。此かけはしをなす所の新なる附加的知識を認むるときに、唯物辯證法の土臺の上に唯物史觀が打ちたてられる。けれども、此附加的知識が認められさへすれば、そこに唯物史觀が存立し得る。長く唯物辯證法をばなれて唯物史觀が支持せられて來たこと、又二者を全く切りはなさうとする努力の存したこと、これらばかり事情に基いてゐると思はれる。

私は今此點に深入りしようとは思はない。けれども、唯物史觀に對する批評が所謂新に附加せらるる社會的歴史的知識に對する批評でもありうる事は、上に述べたところから必然の結論として出て來る。此新につけ加へられたる歴史の社會的知識と云ふのは、少くも次の如き諸命題を含む。

(1) 社會的存在が社會的意識を決定すると云ふこと。フオイエルバッハに於ける主張、即ち存在は意識を決定すると云ふ主張がかく改められてゐる。この社會的と云ふことが今の場合問題となる。

(2) 社會的存在は生産關係によつて、生産關係は生産力によつて決定せらるると云ふこと（此點に

ついて、ことにこの前半についてはなほ吟味を要することも多い。しかしその點は後日の考察にゆづる。

(3) 生産力は自己運動を営む。

従つて、唯物辯證法をとるにしても、なほ、唯物史觀が成立しうる爲には、これらの主張が肯定せられねばならず、前提とせられねばならぬ。私はいま、これらの點のすべてに立入る意圖を有してはゐない。ここにはこの中の最後のもの、即ち生産力が自己運動を営むものであると云ふ點のみを考察する。

マルクスはヘーゲルの史觀に於て自己運動をなすものと見られたる精神の地位に、生産力を置きかへたものと、解せられる。即ち精神の自己發展を歴史の根柢にする代りに、生産力の自己發展をさうしたと解せられる。然らば、生産力は如何にして、又は何故に自己運動を営むのであるか。これは唯物史觀にとつては最も重要なものであらうと考へられる。

二

『社會の生産力と云ふ概念は、史的唯物論の最も重要な概念であつて、それを分析せずには、社會的經濟的構成態の發展の起動力について正確なる觀念を得ることは出来ない。生産力と云ふ範疇は、マルクス主義の歴史理論及び經濟理論が正しく理解されてゐるかどうかを證する一種の試金石である。』³⁾ところが此重要なる概念について、今まで十分なる注意が拂はれたとは云ひがたい。このことが私共の考察の仕事を頗る困難ならしめる。

私の考察の主題は社會の生産力の自己運動が如何にして説明せらるるかにある、即ち、われらは何故に生産力が自ら動くものと認めざるを得ざるかにある。此點を吟味する爲にはまづ、生産力が何を意味するか、について、若干の考察を加へなければならぬであらう。

社會の生産力とは何であるか。それは物質的生產にむけらるる諸要素^{モメント}である。生産の爲に利用せらるる人爲的因子である（此表現に不十分なる點があらうと思ふが、それにも今立入らぬ）。

ところが此生産力が具體的には何を意味するか、従つて如何なるものに大別せらるるかについては、種々なる見解があらう。その重なるもの一二をあげる。第一。生産力は生産手段の總體に外ならぬ。これは一面から見れば技術を生産力と同一視する立場と認められよう（たとへば、ブハアリン、またはルービン）。第二。(a)生産力として擧ぐべきものは生産手段だけではない。その他あまたのものをあげ得るにしても、別して勞働力をあげることを忘れてはならぬ。又はかう考へられる。生産手段といふ物的因子の外に勞働力と云ふ人的因子が生産力として數へられる。(b)けれども、此二者はそれぞれ切りはなされて生産力であるのではない。『生産手段と勞働力は一定の仕方で結合され、そして一定の生産關係の限界内で作用して初めて社會的生產力に轉化する。』『それだけとして見た生産手段は、社會の生産力と同じものではない。それは單に未來の生産過程の可能的要因に過ぎない。マルクスの表現をすれば、勞働と云ふ生きた焰のみが、この因子を死物から甦らせる。生産過程に於ける勞働力との結合に於てのみ、これらの物的勞働手段は勞働

生産性の發展の現實的因子——その生産力となる』⁴⁾ 私は生産力の内容をどう見るかについて、かかる異見の對立の存することを述べて次の點に轉じようと思ふ。

生産手段だけが生産力であることは、マルクス學說の解釋として許されがたきこと、云ふまでもないであらう。勞働力又は勞働者階級が、又はその他のものが生産力であると云ひうべき文句はあまりに多く見出される。けれども、生産力の變動、又は生産力の動きが主として何であるかと云ふことについては、大體に於て一致してゐる見解があると思ふ。それは、生産力の動きを主として技術の動きとして見ることである。生産力として種々なるものが數へ上げられるにしても、そのうち最も顯著に變化してゆくものは生産手段である。勞働者の熟練、勤怠に於ける習慣の變化の如きものの變化はたいした意義をもつものではなからう。生産關係に於ける變化が勞働力乃至勞働の組織の上に作用するのであるが、これはマルクスの立場から見ても、根本的な變動は考へられてゐない。所謂占有せられたる自然力が生産力と見らるるにしても、その變動は緩慢なるものである。結局、生産力變動の中心は生産手段の變動にある。これについては、二種のものを考へうる。一はその量の動きである。例へば鐵道の普及、電力利用の普及など、云はば生産手段の蓄積である。他はその質の動きである。けれども此二者について、やはり重視せられてゐるものは後者にある。後者は技術の變動として表現せられうる。生産力の變動を技術の動きとして見る立場の人人はあまりに多い。一々その文献をあげがたく、又あげる必要もないことと思

4) ゼオリフソン前掲書、270；ラズウモフスキ前掲書、126

ふ。此立場をそのままとらぬ人々とても、生産力の變動の中心が技術の動きにあることを大抵認めてゐる、とも云ひうる。

さて、生産力は如何にして自ら動くものと認められざるを得ないであらうか。唯物史觀が精神の自己運動を否認する限り、歴史に於ける自己運動者を精神以外のものに認めなければならぬのは云ふまでもない。而してそれは今や、經濟の側に、而も生産力に求められた。けれどもわれらは何故に、生産力を自ら動くものと考へざるを得ないであらうか。此問題に答ふことがないとするれば、生産力の自己運動と云ふことも單なる一の獨斷的主張に終るであらう。否、それは生産力を一の形而上學實體に高め上ぐるに止まることとなるであらう。私は此點を、日本に於ける一二の學者について考へて見る事にする。

大森義太郎氏の『唯物史觀』について見よう。『我々は生産手段のいはゞ總概念として生産力なる言葉を選ぶことが出来よう。さうするならば、我々はいまや次のごとく云ふことができる。生産力こそが社會の存在の、社會の構成の、社會の變化の窮極的な基礎である、と。生産力は生産關係を規定する、生産關係は基本的なる社會關係として他の一切の社會諸關係を規定するのである。これをもつて我々は史的唯物論の最も基礎的な部分を明にした、我々の課題の最も根本的なものを果しえた。』⁵⁾けれども生産力は如何にして變動するか。生産力は自己運動を営むのでなくては、歴史の變動の窮極の基礎であることは出来ぬはずである。ところが大森氏によつて説かれたことは、此生産力が變動すると云ふことだけである。『上で説明したやうな生産力が不動のものでなく可變的であることは、説くまでもないであらう。かくて、これによつて規定される生産關係はまた可變的である、生産力の變化に従つて變化する。』⁶⁾然り、生産力の可變であることは云ふまでもない、けれども問題はそれが自ら動くものであるか、否かであり、進みては如何にしてそれが自ら動くかにある。此自己運動性の根據について何等の考察をも、吟味をも加へざるその所説は、云はゞ空中に浮遊してゐないか。大森氏は其本來の立場を貫く爲には此生産力そのもの

5) 大森義太郎著『唯物史觀』、184

6) 同書、185

を(若くは生産力を含むものを)對立物の統一として吟味することにより、その自己運動を説明すべきではなかつたか。大森氏は『自己運動の爲の條件は何か。自己運動は、また運動として、その推進力、その源泉、その動機をもたなければならぬ。』『それゆゑ、自己運動においては、あるものがそれ自身のうちに他のものを藏しなければならぬ。これはあるものが對立物の統一であることを意味する』と説きながら、而して唯物史觀の解説の準備の爲に之を説きながら、此原理によつて生産力の自己運動を説明することがない。かくしてその唯物史觀解説は其根據から切りはなされて、幽霊の如くに浮いてゐる。序に云ふ、生産様式、又は物質的生產そのものを對立物の統一と見ることによつて、其自己運動を説くものは多いが、これでは生産様式の自己運動でない、生産の自己運動が説かれ得ようか。』

日本に於ける他の代表的なる唯物史觀解説書についても、また同様である(例へば福本和夫氏、河上肇氏の著作の如き)。それらは何れも、生産力の自己運動を與へられたる前提となし出發點となし、ひるがへつて、生産力の自己運動そのものを説明しようとしなない。換言すれば、何故にそれらの自己運動を認めざるを得ざるかを問題としてゐない。即ち福本和夫氏の如きも、生産關係を規定するものは生産力であるとなし、此『生産力に對する決定要因はかくて生産手段のみであります、かくして生産手段は、從つてまたテクノロジーは最も終局的な決定要因であります』と述べながら、何故にそれが最も終局的であるかについては、一言の説明をさへ與へられてゐない。

勿論、マルクス、エンゲルスの著作に於て、此點が明にせられてゐるわけではない。その著書、論文、書翰の中には唯物史觀を取扱つたものが少からずある。それにも拘はらず、生産力が何故に自己運動を營むものとして、歴史の窮極の原因としてめられざるべからざるか、と云ふ前述の問題に十分の答解が與へられてゐるとは考へられぬ。否、此問題は提起せられてすら認めないと云ふべきであらう。けれどもこの事は、さうしてよい、それでマルクスの唯物史觀の解説がそれですむと云ふことを意味するのではあるまい。

此點について、私はラズウモフスキの次の如き主張を正當であると思ふ。『生産力と資本主義的關係との間に生ずる矛盾は、これを極めて簡単に、つまり生産力の獨立した成長が資本主義的生産關係の發展を追ひ越すと云ふ風に解釋してはならない。この矛盾をかくの如く解釋するなら

ば、我々は明白な機械論的立場——ブハアリンや、ボグダノフや彼等の追隨者達の立場に立つことになるだらう。かくて生産力は歴史において不明な原因によつて不變に發展するところの、或る超階級的な範疇一般に變ずるであらう。『メンシエヴィキ的生產力論なるものは、生産力が或る偶像に轉化され、一種の新しい神様と化してゐるところにある。生産力の發展は、この理論によつて、社會の狀態とは係りなく、従つてまた階級争闘とも階級的矛盾とも係りなく行はれる、純然たる自働的過程として思惟されてゐる。』⁸⁾さて、よしその答解に於て誤つてゐるにせよ、たとへばカウツキイも、ブハアリンも、生産力を以て不明なる原因によつて不斷に發展するものとは考へなかつた。カウツキイによれば、生産力の發展は自然認識の發展にもとづく。これについては別に立入るまい。ブハアリンは生産力發展の原因を還境たる自然と社會との間の外的矛盾、即ち還境の外的條件の中に求めてゐる。これが自己原因を經濟の中に、少くも社會の中に認むると云ふ唯物史觀の立場に於て許さるべきものであるか。此點についても、詳論する必要はないと思ふ。

三

今まで述べたところは、次の如くである。生産力は唯物史觀の根本概念である。而して生産力が如何にして自ら動くかと云ふことを明にすることが、換言すれば、何故に生産力を自己運動的のものと認めねばならぬかを明にすることが、此史觀にとつて極めて重要な事柄である。而

8) ラズウモフスキ前掲書、119, 179

して、今まで多くはこのことが問題にもされずにきたし、偶々問題とすることがあつても、其答解は極めて不十分のものであつた。

私は自ら此問題を私の立場から提起しなければならぬ。生産力の變動を技術の動きとして見る限り、此問題は生産技術が如何にして自ら動くものと見らるべきかと云ふ問題に歸着するであらう。此問題の書きかへの不備なる點については後に論及するつもりである。なるほど、生産力は變動する。けれどもこれすらも自明のこととは云ひがたい、詳言すれば、生産力の變動が常に必ず行はれて來たとは稱しがたい。發達の低い段階に於て、人類は極めて保守的であり、極めて屢々生産技術と生活様式の變化を厭うた。所謂發展本能の内在を許すことは學問的に許しがたい立場であると考へられる。けれども茲にはそれから離れよう。近代に於てなるほど、生産力は不斷に變化してゐる。けれども、これは果して自己運動と見るべきものであるか。技術の變化が自然科學の發達によつて促さるることは周知の事實である、此限り、それは自ら動くものではない。然るに拘はらず。何故に生産力は自ら動くと考へられねばならぬものであるか。勿論、技術の自然科學の發達によつて動くことが（相互作用の必然性を認むる限り）、唯物史觀を斥けないと云ふことには、何の異見をも抱くのではない。けれども、生産力が自然科學の影響を離れて動く範圍に於ても、それが自ら動くと見るべき論據はどこにあるか（實踐、行爲の結果であると云ふこと、産業と云ふ實踐の中に生起するものであると云ふことは、何等その自己運動性を示すものではないであらう。政治に於けるすべての

變動とても、やはり實踐の所産である。而してそれは勿論自己運動的とはみられない。

私は卒直に信ずるところを述べよう。生産力が自ら動くことと云ふことを信ぜしむべき何物もない。生産技術を動かすこと最も強き自然科学の作用について考へて見よう。(1)自然科学に於ける發明があつても、それがそのまま直に産業に取り入れらるゝのではない。たゞ産業の必要に應じてのみ、資本家の努力を通して生産技術として利用せられる。(2)自然科学自體空中に成立したるものではない、それは産業に刺激せられ、其必要に應じて發達するものではないか。(3)一たび産業の必要に應じて成立したる科學が經濟の上に反作用を及ぼすことは、唯物史觀の立場と相容れざるものではない。さて此最後の點についてはこゝに述べない。私は科學の技術に及ぼす作用を根據にして唯物史觀を覆さうとは考へぬからである。問題は前の二點にある。まづ第一の點。なるほど自然科学の發見は産業の必要に應じてのみ、生産技術として取り入れられる。けれども、發見をまつてのみ新しい技術が成立しうるならば、結局に於て科學が技術を動かすと云ひ得るわけではなからうか。第二の點。科學が産業によつて發達するにしても、科學によつて生産力が動くことと云ふ事實を認むる以上、それはたゞ相互作用を主張しうる根據となるに止まるであらう。生産力が一部分に於て科學の作用を受くるにしても、根本に於て自ら動くことを示し得るのではなくて、相互作用の主張以上に出でがたいのではないか。

けれども私の考察はなほ進まねばならぬ。假に、生産技術の變動が自然科学の進歩から來るにしても、その自然科学の進歩は、何によつて生ずるか。若しこれを自ら動くものとするときに、云ふまでもなく、精神を自己運動者とする歴史觀に入りこまねばならぬ。かかる歴史觀をさけようとする限り、此科學の進歩そのものがまた説明せらるべきものとして残る。而して私の立場から云へば、生産力の變動とても決して單に科學の發達の結果とのみ見がたい。自然科学的知識の與へられたる範圍内に於て、技術の應用の姿はいろいろに變化してゐる。而も、これが生産力の自己運動と見うべきものでないならば、やはり同様に説明せらるべきものとして残る。而して之

を説明しうべきものは、精神乃至社會的意識形態の側にあるのでもない、又同様に經濟の側にあるのでもない。それはこれにとつての第三の側にある。然らば此第三の側とは何ぞや、それは即ち社會關係そのものである。

私はここに於て、マルクスの所謂生産關係の吟味に立入らねばならぬ。生産關係とは生産に於て入りこむ人人の關係である。生産に於ける人と自然との關係がこの中に含まれると見らるる（マルクスの文獻のあるものを基礎として）にしても、それはむしろ切りはなさるべきであらう。此生産關係の總體が或は社會と稱せられ、或は經濟的構造の側から見た社會と稱せられ、或は社會の經濟的構造と稱せられる。又それはヘゲルの市民社會をさすものとも見られてゐるが、このことは近代的生産關係について見る時にのみ、云ひ得らるることであらう。さて、レニンは社會關係を分つて、物質的關係即ち「人間の意識を通過せずして形成される」ところの關係と、イデオロギイ關係とに分つてゐる。前者はまた時に、基本的なる社會關係とよばれる。兎に角、生産關係が社會關係の全體でないことはあまりにも明白なることである。ところで社會關係はこの二種に盡きるであらうか。マルクス自身の言説からみても、別にフオイエルバッハの認めたる第三の關係があるはずである。

『彼（フオイエルバッハ）は現實に存在し活動しつゝある人間に決して到達することなく、却つてどこまでも人間なるものと云ふ抽象體のところに立ちどまり、わづかに現實的な個人的な肉體をもつた人間を感情に於て認めるところまでしか行つ

てゐない。即ち彼の知れる人間の人間に對する人間的關係は、性愛と友情のみにとゞまり、しかも彼はそれを觀念化してゐる。⁹⁾肉體をもつた人間が感情に於て作り上ぐる關係、これは單に性愛と友情のみではない、家族の團結、民族乃至國民の團結はすべてこれである。而してこの社會關係は所謂イデオロギイ關係ではない。人間の意識を通過せずして形成せらるる意味に於て、若くばイデオロギイを仲介とせず、内容とせざる意味に於て、等しく物質的關係とよばれ得る。ただそれが生産關係と異なるところは、人人がその中に生産に於て入りこむのではない點にある。今ここに、之を名づけて純粹關係と云はう。結合の方面のみについて云へば、オオギユスト・コントが協働と對立せしめたる同情、ギディングスが同類意識とよべるもの、ガブリエル・タルドが模倣として見たる社會は根本に於てこれである。それらはすべて利害を離れ、精神的內容の交渉をはなれて成立するところの關係である。

茲に云ふ純粹關係こそは基本的なる社會關係であると云ひ得る。人間は社會をなすうちにはじめて人間として發達して來た、このことは疑ひ得ざる事實である。ところが此過程の中に人間はじめて生産することを學んだ。『最初の歴史的行為は、これらの欲望を満足するための手段の生産、即ち物質的生活そのものの生産である。』『人間自身は、彼等が彼等の生活資料を生産し始めるや否や、自己を動物から區別し始めるのである。』『これらの個人の、よつてもつて動物から區別される所以の最初の歴史的行動は、彼等が思惟するといふことでなく、却つて彼等が彼等の生

9) ドイツチエ・イデオロギイ、三木氏譯、55

活資料を生産し始めるといふことである。¹⁰⁾此意味に於て、人間は社會に於て生産を學んだ。生産を生んだ社會、即ち社會關係は未だ思惟をもたぬ。生産をもたぬ、それは生産關係でもなく、イデオロギイ關係でもない、茲に云ふ純粹關係である。而して、此純粹關係が生産を生むことによつて、そこに生産關係が成立する。此生産關係が純粹關係そのものの作用を受くることは云ふまでもない。生産を生み、生産關係を左右する意味に於て、これを基本關係と見ることも差支のないことであらう。

私が純粹關係を數へ上げたのは更に進んで、生産關係をも分析せんが爲である。一方には人と人との關係としての事象である純粹關係が認められる。然らば、人と人との關係だけを抜き出して來ることも無理なる抽象ではないはずである。生産關係とても、一面から見ると人人の關係である、此關係の方面だけを捉へることも、他方に於ては獨立してゐる事象をあるものとの結合から切りはなして考へると云ふだけのことである。ところで、マルクスの生産關係は其實、複雑なる内容をもつ。それは一方に於て經濟としての生産を含むと共に、人人の關係としての社會又は社會關係である。私は以前から此分析の必要を主張してゐる。事象の聯絡を見る必要上、分析を進むべきものは進めざるを得ざるからである。たとへばルービン¹¹⁾は、而してカアレフは、また、社會的なる關係そのものを物質的生産と云ふものから分離してゐる。此點について、福本和夫氏は、これ具體的なる生産關係を抽象的に切り離し、現實の生産關係を抹殺するものであるが故に

10) ドイツチエ・イデオロギイ、46, 47, 57

非であるとせられた。¹¹⁾けれども現實なるもの、社會的歴史的實在としては、經濟と政治とイデオロギイとともに切りはなしがたいものではないか、福本氏の論法から云ふと、その中から生産關係を取り出すことがすでに許されがたいことではないか。たとへばレニンの社會的經濟的構成態のみが現實的のものであらう、その中から、生産關係や國家や法律を取り出すことはやはり許されがたいことではないか。福本氏の批評、ならびにこれに雷同する徒輩の見方が一顧の値なきこと、云ふまでもない。

さて、前の問題に立ちかへる。生産力を動かすものとして、自然科学の發達が數へられる。けれども此自然科学の發達は何から來るか。一面から云へば精神的なるものの自己運動とも見られよう。けれども、それは個人の努力を離れてはない、而も此努力は個人的のものではない、社會によつて促されたる社會的行動である。ただ一定の階級的組織をもつ社會關係のみが個人をして此發達を實行せしめる。詳言すれば、階級的組織をもつ社會的勢力と云ふゴオルへの競争的突進、又之を他面から云へば、潜在的争闘としての競争、結合の表被に包まれたる争闘としての競争のみがこれを實現せしめる。争闘は萬物の父なりと云ふ。新しき學説は單に古き學説と機械的に相並立するのではない。學説の背後に存する社會的争闘が學説の生々した争闘となつて現はれ、一方の勝利として終る。新しき科學的知識の産業に採用せらるる場合については、此事が一層顯著であらう。

私は一應、前に掲げたる問題に答解を與へねばならぬ。社會關係こそはすべての經濟的なもの、精神的なるものの母胎であり地盤である。分離の關係は明白なる、顯在的な争闘と緩和せられたる、平和的な争闘との二の形態をとる。此後者の支配するところ、つねに新しきものの成長がある。生産力の動きと云ふものもやはり、かかる關係の所産としてのみみらるべきである。

四

私は他の方面から如上の結論に導かうと思ふ。

マルクスに於ける生産力と生産關係は、前者が自己運動を營み、それによつて後者が決定せられると云ふことに盡きる。勿論、相互作用が認めらるることから、生産關係の生産力の動きに作用することが認めらるるにしても、その生産力の動きに應じて生産關係が姿を變へると云ふことには何の變りもない。而して遺骨の骨組から生物の構造が知らるるが如く、技術を示すところの生産手段によつて社會の全體の構造が推知せられると云ふ考方と、この考方との間に如何なる聯絡がありうるか。生産力が主として技術によつてのみ左右せらるるものであるならば、二者の間に一致又は調和が存立し得る。けれども、生産力が若しある程度まで技術から獨立なところのあるものによりて左右せらるるならば、かかる一致と云ふものはあり得ない。これだけを前置にして論をすすめる。

プレハアノフに於ては生産が自己運動を営みこれに經濟關係が應ずるものと見られてゐる。『マルクス及びエンゲルスの見解を簡単に述べようとすれば、われわれは次の如き式をうる。(一)生産力の状態、(二)それに制約される經濟的諸關係、(三)社會的政治的制度、(四)社會的人間の心理、(五)此心理の特性を反映する諸種のイデオロギイ。』かくして、生産力の状態は所謂『獨立した、地理的環境の影響を受けて自動的に發展する因子である』と云ふことになつてゐる。それは何等生産關係の方からの根本的作用を受けるのではない。云はば生産關係は生産力と云ふ第一階の上に立てられたる第二階である。この間の聯絡は屢々機械論的と稱せられる。同一の方向に徹底したるものは、ブハアリンの見解であらう。ブハアリンによれば、生産力は環境と社會との事情に促されて獨立に變動してゆく。此生産力に應じて、而して全くそれに決定せられて生産關係が動く。『勞働手段の組合せ、社會的技術は人間の組合せ及び關係即ち社會經濟を決定する。かくて社會經濟即ち生産關係はブハアリンによつて技術的組合せに、技術的過程に於ける人間の配置に還元せしめられてゐる。』かくて階級的生産關係そのものが技術によつて形成せられたるものであると云ふことになる。生産力と生産關係との關係に關する所謂機械論的傾向はドウブロススキによつて一層發展せしめられたと云ふ¹²⁾。さて私は此點に立ちとどまる。此機械論の見解は、一面から見ると、マルクス唯物史觀の無理なる解釋であるとは云はれ得ないであらう。生産手段が『人間勞働力の發展の尺度たるのみならず、勞働の行はるる社會關係の指示器』でありうる爲には、生産手段又

は技術が生産關係を、生産關係が他の社會事象を決定すると云ふのでなければならぬ。従つて、生産手段を社會の骨組と見る限り、此機械論の見解はさけがたいはずである。若し、生産手段の外に生産力を決定する第二の因子があり、それが程度まで生産手段を離れて動き得るものならば、生産手段と生産力従つて生産關係との聯絡が一義的ではないはずである。

而して私の見るところによれば、此機械論的な見解の下に於ける唯物史觀は事實に於て支持しがたい。私はかつて此點について詳論した。生産技術の自主的な變化、即ち生産力の自己運動が認められがたいこと、生産力によつて生産關係が左右せらるるにしても、前者が一義的に（機械的に）後者を決定するのではない、生産關係の上には、なほ別に作用するものがある（別して前述の意味に於ける純粹關係）。此意味に於て同一の生産力の状態はあまたの姿の生産關係と相伴ひ得るはずである。さきだつところの社會關係は新なる生産力と結びついて新しき生産關係を決定する。而もさきだつ所の社會關係はいろいろのものでありうるし、従つて新なる生産力と結びついてそれが作るところの新しき生産關係も亦種々のものでありうる。而して、唯物史觀の新なる轉向は今や、私のかつて唯物史觀に下したる如上の批評を盡く肯定しながら、なほ自らを支持しようともみつつある。

唯物史觀の機械論的解釋から云へば、生産力が單獨に進行する、此進行に應じて生産關係が變化してゆく。それゆゑに、生産力がある程度以上に進行しなければ生産關係のある程度の進行も

亦不可能となる。結局に於て、生産関係のある程度以上の進行の爲には、生産力の發展をまつ外はない。此結論に満足しないものは、自ら他の方向をとるより致し方がない。

重ねてラズウモフスキの所説を引用する。『労働過程の上記の二方面の統一は、生産力と生産関係との辯證法の中に現はれてゐる。この場合、生産力は、社會的生産全體の内容であり、基礎である。この内容、この基礎は、生産的能力、及び自然に對する人間の積極的態度を表現するこの能力の水準である。生産関係なるものは、この同一の生産過程の特殊の社會的形態であり、人と人との關係である。すでに知るやうに、内容と形式との發展に於けるあらゆる統一は、この兩者の相互滲透であり、同時に其相互排除である。即ちこれらの對立物の相互の辯證法的移行であり、これらの對立物の闘争である。』『生産力なるものは常に、生産過程の物的要因と人的要因との統一——人間の労働力と生産手段との統一である。これは、あらゆる生産過程に缺くべからざる要因であつて、生産過程が可能である爲には此兩者の結合を必要とする。』¹³⁾ところで生産の人的因子たる『労働力は階級社會に於ては常に一定の階級的内容を有してゐる。』

このことは一面から云へば、二の因子の結合するところにはじめてそれらは生産力として存立するのであるが、此結合はつねに一定の歴史的なる階級的關係、從つて生産關係によつて規定せられてゐる。だから生産力と生産關係との二者は相獨立したる本質ではない。二者は形式と内容として統一を保ちつつ、而も相互に滲透する。而して、更に進みて云へば、生産力の動きそのものが生産關係によつて決定せられる。『資本主義の下に於ける生産力の發展は資本主義構造の内的なる法則によつて完全に規定されてゐるのである。資本主義的生産の最も根本的な矛盾、即ち社會的生産と私的領有との矛盾は、マルクスが云つてゐるやうに、有産者をして其生産力を絶へず變革することを餘儀なくせしめ、かくて生産力は、有産者による其利用が可能なるべき限界を超

えて成長するに至る。¹⁴⁾』

私は同様な主張を、ザオリフソンの言葉によつて繰返さう。『生産力と生産關係との間には單なる機械的結合でなく、深刻なる辯證法的統一があることは明かである。生産力の諸要素そのものは、これらの要素が生産關係の形式内にあるとき初めて活動的生產力に轉化する。生産力の發展そのものは生産關係の働きかけを蒙る。』『生産力の發展に於ける變革であつた産業革命は、資本主義的生產様式の確立に導いた。内容の變化が形式の變化を招來したのである。だが新たな階級が經濟の舵を握つたことは、生産力の一層の發展を來した。何となれば、資本蓄積の關心は自由競争の狀態の下で、資本主義繁榮期の資本家から技術、科學等の發展を要求したからである。¹⁵⁾』

所謂機械論的見解を斥くる所のかかる立場からすれば、生産關係は「本來生産力によりて定まるがただ反作用的、副次的にのみ、生産力に働きかける」と云ふものではなく、それはむしろ生産力の一決定因子であり、且つまた、生産力別して生産技術をも變化せしめる。此意味に於て、生産關係そのものを變化せしむることは生産力を變化せしめ、それを通して來るべき社會を早くもち來すと云ふことになる。兎に角、生産力は機械的に、一義的に、生産關係を決定するものではない。

唯物史觀のかかる解釋が、生産手段を以て社會關係の指示器と見る立場とどこまで一致し得るかにについては、再考の機會をもちたいと思ふ。ただ、かかる見解の成立するに至つた事情には注目すべきものがある。生産關係自身が生産力を變化せしむると云ふ事實は認められざるを得なかつたのである。而も進みて考へよう。資本主義的生產關係が生産力の變革を來すと云ふことは、最

14) ラズウモフスキ前掲書、179

15) ザオリフソン前掲書、301

も重なる方面についていふと、資本家の競争を通して、新しき技術が成立することを意味するのではない。云はば競争と云ふ社會關係が勿論種々の具體的事情をまつにせよ、新しき生産力を生むと云ふことに外ならぬ。加之、生産力は一方、自ら變動するものと認められてゐるが、此變動の如何にして行はるるかについては全く説かれてゐない。結局、これだけから、寧ろ我等の學び得るところは、内容がただ形式によつて、生産力が生産關係によつて動くと云ふことだけである。かかる方向に於ける見方の落ちつく所は、『形式をば内容の發展を含み、且つ之を從屬せしめむとするところの、或る自足的なるものに轉化せしめむとする動向』である。かくして、私が唯物史觀の最近に於ける諸方向の吟味の後に到着するところは、生産力の動きが根本に於ては、生産關係、更に立入つて云へば、生産と切り離して考へ得べき社會關係の所産に外ならぬと云ふことである。かくして、前に説明したる見方に到達した。

生産力を動かすものは何ぞや、それは社會關係である。これの作用によつて新しき技術が成立すると、その性質と社會關係自體の姿と相結合することによつて、生産關係が作り上げられる。然らば、社會關係そのものは如何にして變動するか。これが當然一次に究めらるべき問題である。根本に於てはただ、人口の動きによつてと答へる。人人は此立場に對して、人口の増加は生産力の發達の結果であると云ふのを常としてゐる。これは極めて陳套なる、而して皮相なる見解である。此點について、なほ社會關係こそは社會的事實の基礎をなすものであると云ふ點について、筆を改めて論じよう。(一九三三、四、三、午前)。